

「きっとまた会えますよ。」私はこの言葉を一生忘れない。辛い時、悲しい時、私はいつも A 氏の言葉を思い出す。

看護学校二年生になったばかりの実習。私が受けもたせて頂いた A 氏は、がん末期で余命半年と告知されていた。口数は少ないが、私のつたない援助をいつも温かく見守ってくださっていた。ある日、一緒に散歩へ出掛け、車いすを押す私に、「あなたを見ていると私も実習の時を思い出すの。」と A 氏は語り始めた。A 氏は看護師の先輩であったのだ。その中には、A 氏が患者という立場になって初めて感じたことや、看護への思いが詰まっていた。その中でも、「何があっても最後まで笑顔で頑張る」ということは、今の私の心の中で支えとなっている。言葉通り、A 氏も痛みが激しい中、諦めることなく弱音一つ吐かず「できる限りのことはしたい。」と前向きに治療へと向かわれていた。

実習最終日、お礼を伝えるに訪室させて頂くと、お休み中にもかかわらず、私に気付いて下さりそっと目をあけられた。「今日で実習最後なんです。本当にお世話になりました。」と伝えると、私は我慢していた涙が込み上げてきた。きっと知らず知らずのうちに沢山ご迷惑をお掛けしてしまっていたのではないか、もう、きっとお会いすることは出来ないのだろうかと思うと涙が止まらなかった。A 氏は、泣きじゃくる私の手をそっと取り「こちらこそ、ありがとうね。」と優しく微笑んで下さった。そして、「絶対に看護師さんになってまたこの病院に戻って来てちょうだい。」と話された。お礼を伝え、関連病院へ就職したいことを話すと「あら、そうなの。じゃあ、最後の最後にまた会えるかもしれませんね。」と答えられた。私はしばらく意味が繋がらず、固まってしまっていた。すると A 氏が再び話をはじめた。「私、そこの病院で解剖して貰うの。だから、きっとまた会えますよ。」それは、献体を意味していた。私は、やっと意味が分かり「はい。きっとまたいつか。」と頷くことが精一杯であった。

医学の進歩のために、少しでも役に立つことが出来ればと、最後まで看護の道を歩もうとする先輩の姿を見て、私も何があっても諦めないと心に誓った。

実習や、学校生活を通し、看護師という職業の厳しさを実感する毎日である。しかし、頑張る続けることで、辛いこと、苦しいことを乗り越えてこそ、成長出来るということも知った。そして何より、患者さんとの新たな出逢いの中で、沢山の宝物を頂いている。そのような中、A 氏との約束がいつも心の支えとなっている。